

琉球大学学術リポジトリ

多良間島における染料植物の民俗利用に関する調査研究

メタデータ	言語: 出版者: 琉球大学農学部 公開日: 2016-08-22 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 前堂, 結, 仲間, 勇栄, 陳, 碧霞, 来間, 玄次, Maedo, Yui, Nakama, Yuei, Chen Bixia, Kurima, Genji メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/34965

多良間島における染料植物の民俗利用に関する調査研究

前堂 結¹, 仲間勇栄^{2*}, 陳碧霞³, 来間玄次⁴¹2010 年度生物生産学科森林政策学研究室卒業生²琉球大学名誉教授 ynakama@agr.u-ryukyu.ac.jp³琉球大学農学部亜熱帯地域農学科助教⁴2013 年度鹿児島大学大学院連合農学研究科博士課程卒業

Folk Dyeing Using Plants on Tarama Island, Okinawa Prefecture

Yui MAEDO¹, Yuei NAKAMA^{2*}, Bixia CHEN³, Genji KURIMA⁴¹Former student, Department of Subtropical Agriculture, the Faculty of Agriculture, University of the Ryukyus²Emeritus Professor, Visiting Professor, University of the Ryukyus³ Assistant Professor, Department of Subtropical Agriculture, the Faculty of Agriculture, University of the Ryukyus⁴Former student, the United Graduate School of Agricultural Sciences, Kagoshima University

Abstract:

In this study we interviewed the local knowledgeable people in terms of the traditional dyeing plants and methods for the costumes used in "hachigatsu odori" (a local festival for harvest celebration held annually in August of the lunar calendar), which was designated as an Important Intangible Folk Cultural Properties of Japan, and conducted dyeing experiments based on the information obtained from the interviews.

At present, the fabric of the costumes used in "hachigatsu odori" are dyed with man-made synthetic dyes, however, dyes from herbs and trees were used to dye costume fabrics in the past on Tarama Island. Various plants have been used to extract colors, e.g., *fukugi* (*Garcinia subelliptica*), *terihaboku* (*Calophyllum inophyllum*), towel gourd (*Luffa cylindrica*), *sharinbai* (*Rhaphiolepis indica* ssp. *umbellata*), and *yaeyama aoki* (*Morinda citrifolia*). In particular, *fukugi* trees were widely used to extract yellow color to dye the costumes in the parts of *hakama* (a traditional Japanese clothing resembling skirt-like trousers), *haori* (coat), *furoshiki* (wrapping cloth), and flags.

The process of dyeing from *fukugi* varies significantly depending on the material to be dyed, the time and method of soaking the material in boiled water, and methodology involved in the transfer of color to the textiles. *Fukugi* tree stem was hit with a hammer to help separate the bark the stem, and then barked as natural dyeing material. Then, the barks were soaked and boiled in water in a large pot. The period of heating was not fixed.

There existed three essential ways of fixing colors to the textiles or fibers; 1) Soak and heat the material in water, and then dye the textiles in the liquid made from the boiled down bark. 2) Soak the textile in the liquid made from boiled down barks and wood-ash liquid separately. 3) Soak the textile in the mixed liquid that made from boiled down barks and wood-ash liquid.

We found that the best way to "fix" color or the fastest way to transfer the color is as follows. The bark should be soaked and heated in water for 2 hours. The boiled down bark liquid has a pH value of 4.85 and Baume of 3.0. After mixing wood-ash and water in 1:2 volume ratio, we obtained the wood-ash liquid with a pH value at 10.5 and Baume at 4.0. Finally, the above mentioned color fixing method 2) was used. Soak the textile in the liquid made from boiled down barks and wood-ash liquid separately.

It can be concluded that in the past, the costumes used for "hachigatsu odori" must have been dyed in a manner similar to the above conditions.

1 序論

1. 研究の背景

沖縄では昔から、染色に植物をよく利用していた。主な染料植物にはリュウキュウアイ、フクギ、シャリンバイ、クチナンなどがある。染料植物は媒染によって様々な色を出す事ができる。また同じ植物でも育った環境や様々な条件の違いによって出る色が違う。沖縄の藍染めや芭蕉布などには、植物染料が使われているが、その色合いは、地域によって微妙に異なる。

多良間島では「八月踊り」と称される豊年祭が毎年行われている。伝承によれば、この「八月踊り」は300年の歴史をもつという。そのため1976年に国の「重要無形民俗文化財」に指定され、UNESCOへの登録も提案されている。

「八月踊り」の特徴として、衣装や小道具などの種類の多さがあげられる。現在、衣装以外の小道具類などは、すべて手作りである。昔は「八月踊り」の衣装は、多良間島で採れる植物で染色していた。しかし現在では、ほとんどの衣装(既製品)を島外から購入している。

「八月踊り」の衣装には、過去に植物染料を使って染め上げられたものが多いが、現在、それらの染色技術を受け継ぐ人はおらず、記憶している古老達も数少ない。今のままでは、その土地固有の伝統的染色方法は、やがて消滅していく運命にあるだろう。これらの技法を後世に継承していくためには、その技術を少しでも記憶している古老達から聞き取りし、それを後世の人々が再現できるように記録保存することが急務である。

2. 先行研究のまとめ

多和田真淳著『多和田真淳選集』(1980)には、沖縄の染色植物について、ベニバナ、ヤエヤマアオキ、フクギなどのことが記録されている。上村六郎著『沖縄の染色文化の研究』(1982)では、沖縄の色彩の材料として藍やフクギなどが報告されている。戦前期、児玉沖縄県技師(1915)は、県内の染料植物をリストアップし、その利用方法について概説している。藤村(1974)は『民俗資料第1集』で、多良間島の「八月踊り」の衣装のフクギ染めについて、その概要を述べている。『多良間村史』(第四巻資料編3民俗、1993)には、染料植物の大まかな利用方法や、「八月踊り」の演目に関する記述が見られる。岩井(2006)らは、音楽人類学的アプローチか

ら「八月踊り」を報告している。

しかしながら、「八月踊り」の衣装に関する染色方法や、その材料となる染料植物についての詳細な報告事例は、ほとんどみられない。

3. 研究の目的と方法

本研究の目的は、多良間島の「八月踊り」で使用されている衣装の伝統的な染色方法と、その材料となる植物の種類を明らかにすることである。

多良間島の島民50代~90代の男女24人に聞き取り調査(2010年8月26~9月18日)を行った。調査項目は、染料植物、衣装の種類、染色方法の3つである。

衣装の染色方法については、聞き取り情報と残されている染め織物から伝統色を特定するため、以下の方法で実験を行った。

多良間島に生育するフクギから皮を採取した。採取した皮、6kgを100℃のお湯に投入した。投入後30分、1時間、2時間、3時間ごとの煎汁を採取した。

灰汁にはイタジの灰を用いた。灰と水の体積割合を1:2の場合と1:3の場合に分け、攪拌して5日間放置した。

次に、各時間別のフクギの煎汁に布を浸し、絞って広げ空気に触れさせた。この方法を3回繰り返した。

次にフクギの煎汁に浸した布を、灰と水の体積割合が1:2の灰汁及び1:3の灰汁にそれぞれ浸し、絞って空気に触れさせた。この方法を3回繰り返した。

各時間別に採取したフクギの煎汁と灰と水の体積割合が1:2の灰汁及び1:3の灰汁をそれぞれ混ぜ、合計8種類の混合液を作った。それぞれの混合液に布を浸し、絞って広げ空気に触れさせた。この方法を3回繰り返した。

同時にpHメータとDuotest、塩ボーム計を用いて各時間別に採取したフクギの煎じ液と、灰と水の体積割合別の灰汁のpH値とボーム比重を測定した。

II 調査地の概要

1. 島の概要

多良間村は那覇市から350km、宮古島と石垣島とのほぼ中間に位置している。多良間村は多良間島と水納島からなる。多良間村は人口1,320人(2010年3月現在)、面積19.75k

m²の楕円形の島である。水納島は多良間島から約8km離れた北方にあり、面積は2.153km²の芋の形をした島である。

主な産業は農業で、サトウキビを中心に野菜、葉たばこ等の農作物が栽培されている。特にサトウキビの単収は、県内でトップレベルの地域である。畜産業も盛んところで、近年、草地開発事業の実施やセリ市場の開設などで、肉用牛の生産が増えてきている。特産品として、黒糖、ヤギ肉、ばなばんびん、などがある。

多良間島は「フクギの里」とも呼ばれるほど、島内にフクギの木が多くみられ、村木にも指定されている。フクギは古くから防風・防潮・防火のため、屋敷や御嶽などに植えられてきた。琉球王朝時代に系譜をもつ「ポーグ」(村抱護)は、集落の西側から東側にかけて、集落を囲むように植栽されている。この「村抱護」の歴史景観は、今日、沖縄では唯一、多良間島だけに残されている。この「村抱護」は、1974年12月に沖縄県の天然記念物に指定され、保全措置がとられている。

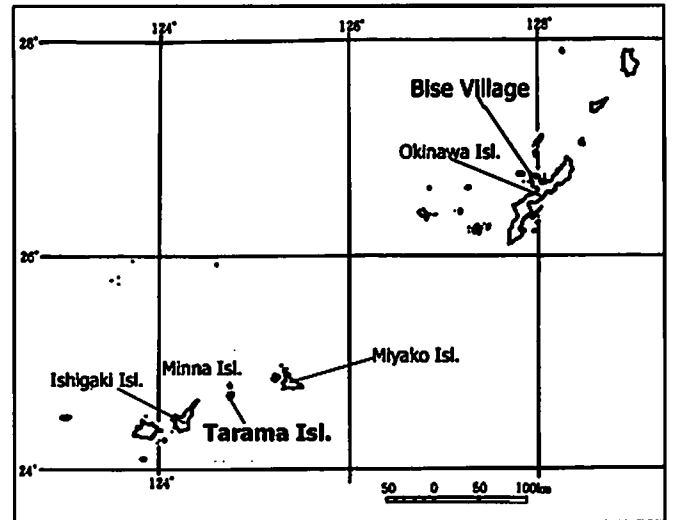
村花は紅花で、古くから染料や薬草として、島民の暮らしの中で使われてきた。かつて琉球王朝時代に王府に貢納品として上納したこともあって、島外ではタラマバナの名称で呼ばれている。

多良間島には、集落を囲むように御嶽が存在し、それらの御嶽には島独自の植生が発達している。その中でも、塩川御嶽、運城御嶽、普天間御嶽などには、独特の御嶽林が形成されていることから、県の天然記念物に指定されている。また、海岸域にはアダン、テリハクサトベラ、オオハマボウ、ハスノハギリなどの自然植生が発達し、潮風害から農作物を守っている。

多良間村の集落は、島の北側に集中して形成されている。かつてほとんどの屋敷の周辺はフクギ林で囲まれていたが、1960年代以降、コンクリート家屋の出現で、多くの屋敷林が伐採され、現在、一部の屋敷に残されているのみである。しかし、集落の後方(北側)には森林地帯が残され、また、集落の西側から東側にかけて林帯の「ポーグ」(村抱護)が集落を取り囲み、その外周に御嶽林が配置されていて、昔の伝統景観を今に伝えている。これらは琉球王朝時代の風水思想に基づいて作られた歴史景観で、県内では多良間島だけに残されている貴重な文化遺産である。この歴史景観は、2010年に琉球風水村落として、「日本で最も美しい村」連合の1つに選

定されている。

多良間島の年中行事で代表的なものは、「スツブナカ」と「八月踊り」である。「八月踊り」では、伝統的組踊りをはじめ、さまざまな村芝居などが上演され、毎年、県内外から多くの観光客が訪れる。その伝統や歴史的継承が評価されて、1976年5月に国の「重要無形文化財」に指定されている。現在、ユネスコへの登録申請がなされ、島内外で関心が高まりつつある。



図Ⅱ-1 多良間島の位置

2. 「八月踊り」の歴史

『多良間村史』第五巻資料編4 芸能(1989)によれば、「八月御願」は300年前に実施された人頭税をきっかけに行われるようになったという。納税義務を果たした安心感、また、それは神の加護によるものとして各御嶽に祈願祭を行ったことが習俗となったらしい。「皆納祝」や「民俗踊り」で始まったものが、今日まで継続され演じられてきているという。

当初、「八月踊り」は、島で創作された「民俗踊り」(獅子舞、棒踊り、ヨウイシー等)のみが演じられていたが、明治の初期から中期頃になって、「古典踊り」や「組踊」が沖縄本島から伝播し、現在の演目の構成になったという。

古老の伝承によれば、古くは「皆納祝」といわれ、宇の帳簿にもそのように記されていた。旧暦の七月に皆納した後、八月に「八月御願」の祭事を行った。「八月御願」では、皆納の報告と五穀豊穡に感謝し、来年の豊作を祈願した。旧暦の8月8日から10日までの3日間、宇仲筋は土原御願所で、宇塩川はピトゥマタ御願所で、祭りと皆納祝が行われるようになった。

当時、「奉納踊り」は、島で創作された「民俗踊り」のみが演じられていたが、明治中期頃になって、「古典踊り」や「組踊」が沖縄本島から伝播し、同時に演じられたようになった。

演目は、総引き、獅子舞、白髪の老人、よーいしー、棒踊り、長寿の大主、キネツキ踊り、三瓶、端踊り、若衆踊り、女踊り、二才踊り、狂言、組踊などで構成され、これらはすべて島民が演じている。



写真Ⅱ-1 若衆踊り（字仲筋）



写真Ⅱ-2 組踊りの按司役（字仲筋）

Ⅲ 多良間島における染料植物の民俗利用

1. 多良間島の染料植物

染料植物とは植物の葉、花、樹皮、幹、茎、根、果実などに含まれる色素を抽出して得られる植物由来の染料のことである。

『多良間村史』第四巻資料編3 民俗（1993）によると、多良間島の染料植物として、藍、フクギ、モクタチバナ、テリハボク、クチナシ、ヒメクマヤナギ、ヘチマ、ベニバナ、モクマオウ、ヤエヤマアオキなどが報告されている。多良間島の「ふるさと民俗学習館」の資料には、14種類の染料植物が記載されている。その14種類の植物を列記すると、以下のとおりである。



写真Ⅲ-1 フクギ

和名：フクギ

科：オトギリソウ科

学名：*Garcinia subelliptica*

方言名：フクギィ・ギー

色素：黄色・オレンジ系

染色方法：樹皮を石灰と煮込んで染料を得る。



写真Ⅲ-2 ヤエヤマアオキ

和名：ヤエヤマアオキ

科：アカネ科

学名：*Morinda citrifolia*

方言名：ムルクス

色素：黄色・橙色

染色方法：木質部・根を煮込んで染料を得る。



写真Ⅲ-3 ベニバナ

和名：紅花

科：キク科

学名：*Carthamus tinctorius*

方言名：タラマバナ

色素：橙色

染色方法：花を絞って染料を得る。



写真Ⅲ-4 クチナシ

和名：クチナシ

科：アカネ科

学名：*Gardenia jasminoides f. Grandiflora*

方言名：フスナス

色素：黄色

染色方法：熟果を潰して利用する。



写真Ⅲ-5 ヘチマ

和名：ヘチマ

科：ウリ科

学名：*Luffa cylindrica*

方言名：ナビラー

色素：緑色

染色方法：葉の絞り汁で緑色に染める。



写真Ⅲ-6 オオハマボウ

和名：オオハマボウ

科：アオイ科

学名：*Hibiscus tiliaceus*

方言名：ユナギー

色素：黒色・灰色

染色方法：木質部を焼いて木炭化し、ご汁（大豆をひいた汁）と混ぜて使用する。



写真Ⅲ-7 ヒメクマヤナギ

和名：ヒメクマヤナギ

科：クロウメモドキ科

学名：*Berchemia lineata*

方言名：ビキドウツケン

色素：紫色

染色方法：熟した果実を潰して染める。



写真Ⅲ-9 ゲットウ

和名：ゲットウ

科：シヨウガ科

学名：k m方言名：シャニン

色素：褐色

染色方法：茎葉を煮込んで染色素材とする。



写真Ⅲ-8 ガジュマル

和名：ガジュマル

科：クワ科

学名：*Ficus microcarpa*

方言名：ガズマギー

色素：褐色

染色方法：樹皮を煮込んで染料を得る。



写真Ⅲ-10 シャリンバイ

和名：シャリンバイ

科：バラ科

学名：*Rhaphiolepis indica var. umbellata*

方言名：ツケウス

色素：赤褐色

染色方法：木質部を短めに切り、煮込んで染料を得る。



写真Ⅲ-11 トキワギョリュウ

和名：トキワギョリュウ
科：モクマオウ科
学名：*Casuarina equisetifolia*
方言名：モクモウギー
色素：茶色
染色方法：木質部を煮込んで染料を得る。



写真Ⅲ-13 ハマサルトリイバラ

和名：ハマサルトリイバラ
科：ユリ科
学名：*Smilax sebana*
方言名：クールグツー
色素：赤褐色
染色方法：地下茎（根）から染料を得る。



写真Ⅲ-12 テリハボク

和名：テリハボク
科：オトギリソウ科
学名：*Calophyllum inophyllum*
方言名：ヤローギ
色素：赤色
染色方法：樹皮を剥いでそれを煮込んで染料を得る。



写真Ⅲ-14 モクタチバナ

和名：モクタチバナ
科：ヤブコウジ科
学名：*Ardisia sieboldii*
方言名：ツケーウス
色素：赤褐色
染色方法：木を短めに切りそれを煮込んだ汁で染める。

2. 八月踊りの衣装とその染色方法

1) 聞き取り調査事例

(1) 50代の男性(宇塩川、スタッフ座長): 昔、フクギの皮を利用して衣装を染色していた。多良間島で昔染めていた衣装は、袴、羽織、ウツフリ(写真Ⅲ・16・17・18)などであったと聞いている。しかし、現在使用している羽織は5年前に石垣島の有名な工房で染めたもので、黄色はフクギ染めである。袴、ウツフリ、羽織などは、35年前までは、フクギで染めたものを使用していたが、そのあとは、色が落ちてきているので、染め粉を使用して染めていたと思う。30年前に多良間島に戻ってきた時には、「八月踊り」の衣装は、島内産の植物では、既に染められていなかった。その理由としてフクギの皮が手に入りにくいからだと思う。20年くらい前からフクギ染めはなくなり、徐々に既製品を購入するようになった。現在は他地域に染色を頼むようになっている。ウツフリは、20年前に沖縄本島で染めたものを購入し使用している。小道具などは、すべて手作りである。袴などの黄色い衣装以外の着物などは、宇内の人から借りていた。20年前から字で購入するようになった。衣装の染色方法についてはわからない。

(2) 50代の男性(塩川): フクギ、ヤエヤマアオキ、ヘチマ、テリハボクなどを、染料として利用していたと聞いたことがある。緑色はヘチマで染めた可能性が高いと思う。衣装や道具の赤色は、テリハボクの皮から染めたことと聞いたことがある。フクギ染めの染色方法については、見たことはなかったが、大きい鍋で炊いていた、と先輩から聞いた。

(3) 50代の男性(仲筋): 「八月踊り」の袴の黄色は、フクギの皮からとっていたもので、フクギで染めた黄色は、重みがあり渋みがあると聞いた。今の黄色は鮮やか過ぎて、昔の染色された物が綺麗だったと聞いている。染色方法についてはよくわからない。フクギの皮をハンマーでたたいて採取し、それを鍋で炊いていた記憶がある。古い木ほど良いと言われていた。昔、色止め(媒染)を何で行っていたかはわからない。色止めには、もしかしたら灰を利用していたかもしれない。

(4) 60代の男性(仲筋、スタッフ座長): 大先輩達から、衣装はフクギ染めしかなかったと聞いていた。フクギの中でも染まらない木があったと聞いたことがある。若い木は薄くしか染まらないので、古い木で年数のたった木が染料には適していた。昔、ヘチマで染めていたのを聞いたことがない。ヘ

チマで染めるようになったのは、10年前くらいのことだと思う。「八月踊り」の衣装の水色は、他所で染めていたものを使用していた。昔から青い着物と黄色の袴の衣装の組み合わせは決まっていたが、踊りの衣装は踊る人が個人で借りてきたので、踊り手が変われば衣装も変わる。しかし、高価な着物を人から借りることは大変ということになり、20年前に字で着物を購入し、現在それを使っている。仲筋の衣装の中で、昔、多良間島で染めたものは、袴、風呂敷、羽織、旗などであったと聞いている。フクギで染めたものの中で今でも使用している衣装は、60年以上前に染められた袴1着である(写真Ⅲ・15)。残りの袴は15~16年前に作ったと思う。羽織の2着は60年くらい前に作られたのを今も使用していて、残りの2着は5~6年前に布を買ってきて作らしたものである。羽織の絵は新しいものである。風呂敷は70年~100年前に染められたものを現在も使用している。昔は真っ黄色だったと考えられるが、現在は色落ちしている。旗は60年以上前に染められたものだと思うが、色が薄くなっているということで、2年前に生地の上から色をぬってしまった。昔の衣装が綺麗だった。昔のフクギ染めには、各家庭で豆腐作りや風呂を沸かす際に出る薪の灰を利用していた。

(5) 60代の男性(仲筋): 王様(按司役)の袴をフクギで染めていたと聞いたことがある。染色方法については50~60年前の小学生の頃、実際に見ていた。フクギの皮を木の幹の3分の1くらい取ってきて、それを大きな鍋に入れ、薪を燃やして煎じていた。冷ました煎汁に布をつけて染めていた。

(6) 60代の女性(塩川): 袴をフクギで染めていたと聞いたことがある。フクギの皮を大きい鍋(シンメナービ)に入れ、薪で24時間炊いていた。30年前に見たことはあったが、やっていないから詳しくはわからない。

(7) 70代の女性(塩川): 昔、オバアさんからフクギやテリハボクで染めていた話を聞かされた。祖先にあたる人がスタッフ座の時(100年くらい前)、初めて「八月踊り」の衣装の袴を染めたと聞かされている。その祖先の屋号はツールヤーという。黄色い家という意味である。衣装の染色方法についてはわからない。

(8) 80代の男性(仲筋): 王様(按司役)の袴をフクギで染めたと聞いている。フクギの皮を炊いた汁を洗濯用のタライに入れて、布を色がつかまで浸しておき、その後、太陽に干していたと思う。スタッフ座じゃないから、詳しくは覚えて

いない。

(9) 80代の男性(仲筋、元スタッフ座): 王様(按司役)の袴をフクギで染めたと聞いている。シャリンバイ(方言: ツケウス)の根っこの皮を赤色が出るまで煎じ、それで染めていた。フクギの皮は煎じると黄色がでる。フクギの皮を剥いでドラム缶に水と一緒に入れ、色が出るまで煎じていた。

(10) 80代の女性(仲筋): 王様(按司役)の袴をフクギで染めたと聞いている。20年くらい前、夫が字長だった時に、男性の研究者が来島して、多良間のフクギの皮を大鍋で炊き、その汁を別の容器に移し、それに布をつけた。その時は麻で織った布を使っていた。手伝いだけだったので、染色時間や浸す時間などについては、よくわからない。

(11) 80代の女性(塩川): 王様(按司役)の袴や風呂敷などをフクギで染めていたと聞いた。フクギ染めは盛んで、オーバー(女性の年寄)が染めていた記憶がある。自己流で染めたことがある。フクギの幹をハンマーでたたいて、皮がめくれてきたら、斧などを使って皮を採る。それを2~3日干し、大鍋に入れて2時間くらい煮込む。色を出すために、重曹と少しだけ灰汁を入れた。そうするとすぐに色がパッと出た。フクギの皮から出た黄色の色素に糸を浸し、それを取り出して水洗いする。その糸を空気に触れさせて色を見る。自分が出したい色になるまで同じことを繰り返す。昔、自分達で豆腐を作ったり、お風呂や料理に薪を燃やしていたので、竈から出る灰をフクギ染めに利用していたと思う。木を切ってきて燃やして灰を作ることもあったが、母が全部やっていたので、どの木の灰なのかはわからない。私が16歳~17歳の時に、お母さんが染めていた記憶があるだけ。

(12) 80代の女性(塩川): 妹が宮古上布をしているので、自己流ではあるが、自分でもいろいろな植物で染めたことがある。5、6年前に仲筋の袴と風呂敷をフクギで染めた。肥料袋3つ分くらいのフクギの皮を大鍋で約1日中炊く。目安は皮の色が薄くなってきたら、皮を炊くのをやめる。ムラができないためにも、煎じた汁を濾して別の容器に移す。ガジュマルの灰を水につけてすましておき、濾した灰汁を別の容器に移す。初めに糸や布を濾した煎汁につけて、絞って空気に触れさせ、それを灰汁につけて絞り空気に触れさせる。フクギには葉が大きいものと小さいものがあるが、大きいものは色が薄いので、葉が小さいものを使用すると良い。フクギの皮は乾燥したものより、生の皮の方が色が濃く出る。



写真Ⅲ-15 袴(字仲筋)



写真Ⅲ-16 袴(字塩川)



写真Ⅲ-17 羽織(字塩川)



写真Ⅲ-18 ウツフリ° (字塩川)

3. 聞き取り調査のまとめ

「八月踊り」の衣装を染色する際に使用していた植物は、最もフクギが多く、次いでテリハボク、ヘチマ、シャリンバイ、ヤエヤマアオキなどであった。植物で染色した衣装は、袴、羽織、風呂敷、旗などであった。フクギを利用した染色方法は、①材料の採取、②材料の煮込み時間と方法、③布に色を定着させる方法、の3つに分けられる。

それらの工程は、次のように行われていた。フクギの幹をハンマーなどで叩き、皮を剥ぎ、染色材料を採取する。大きな鍋に採取したフクギの皮の材料を入れ、薪で煮込む。煮込む時間や皮の量、布や糸を浸す回数などは、決まっていなかった。さらに布や糸に色を定着させるには、以下の3つの方法が行われていた。①煮込んで得られた煎汁のみに浸し染色する方法。②煎汁と灰汁に別々に浸し染色する方法。③煎汁と灰汁を加えた混合液に浸し染色する方法。昔は、各家庭で薪が普通に使用されていたこともあって、庵の灰が入手しやすく、それを染料の媒染として使っていたようである。

仲筋集落では、フクギの皮は、宮古遠見台や泊御嶽などがある島の北側の周辺から調達していたという。若いフクギの木の皮は、色が薄くしか出ないため、古くて大きな木を選ぶようにしたらしい。仲筋集落での話では、同じフクギの木の皮を全て剥ぎ取らず、木を養生しながら、その一部分を剥ぎ取り、再生したあとに、また別の個所を剥ぎ取るやり方も行われていたようである。

先述のように、フクギを利用しての染色方法は、材料の採取、材料の煮込み時間と方法、布に色を定着させる方法、の3つに大きく分けられるが、以下、それらの工程を写真を使って説明する。

4. 聞き取り調査に基づく染色工程

写真Ⅲ-19～20 は、材料を採取する工程である。フクギの皮の幹をハンマーなどで叩き、皮を剥ぐ。



写真Ⅲ-19



写真Ⅲ-20

写真Ⅲ-21～22 は、材料から染料を抽出する工程である。大鍋に水を入れ、薪を燃やし沸騰させる。次に沸騰したお湯にフクギの皮を投入して煮込む。



写真Ⅲ-21



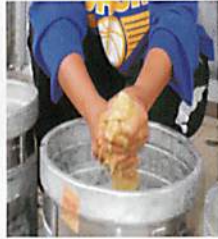
写真Ⅲ-22

布や糸に色を定着させる 3 つの工程は、以下のとおりである。

写真Ⅲ-23～25 は、フクギの皮の煎汁のみに浸し、染色を行う工程である。手順は布をフクギの皮の煎汁に浸し、絞って空気に触れさせる。



写真Ⅲ-23



写真Ⅲ-24



写真Ⅲ-25



写真Ⅲ-26～30 は、煎汁と灰汁に交互に浸し染色を行う工程である。手順は布をフクギの皮の煎汁に浸し絞って空気に触れさせた後、灰汁に浸し絞って空気に触れさせる。この工程を意図する色になるまで繰り返す。



写真Ⅲ-26



写真Ⅲ-27



写真Ⅲ-28



写真Ⅲ-30



写真Ⅲ-29



写真Ⅲ-31～33 は、煎汁と灰汁を加えた混合液に浸し染色する工程である。布をフクギの皮の煎汁と灰汁を混ぜた混合液に浸し絞って、空気に触れさせるという手順で行う。



写真Ⅲ-31



写真Ⅲ-32



写真Ⅲ-33



以後、フクギの皮の煎汁のみに浸し染色を行う方法をパターン 1、得られた煎汁と灰汁に別々に浸し染色する方法をパターン 2、得られた煎汁と灰汁を加えた混合液に浸し染色する方法をパターン 3 として説明を行う。

5. 布の染色実験

衣装の染色方法については、聞き取り情報と残されている染め織物から伝統色を特定するため、以下の方法で実験を行った。多良間島に生育するフクギから皮を採取した。採取した皮 6kg を 100℃のお湯に投入した。投入後 30 分、1 時間、2 時間、3 時間ごとの煎汁を採取した。灰汁にはイタジの灰を用いた。灰と水の体積割合を 1 : 2 の場合と 1 : 3 の場合に分け、攪拌して 5 日間放置した。次に各時間別に採取したフクギの煎汁と、灰と水の体積割合が 1 : 2 の灰汁及び 1 : 3 の灰汁をそれぞれ混ぜ、合計 8 種類の混合液を作った。同時に pH メータと Duotest、塩ボーム計を用いて各時間別に採取した煎じ液と、体積割合別の灰汁の pH 値とボーム比重を測定した。

聞き取り調査から得られた 3 つの染色方法に基づき、染色を行うためのパターンの手順を示すと、以下のようになる。まず、パター

ン1では各時間別に採取したフクギの皮の煎汁4つのサンプルを使用した。次にパターン2では、各時間別に採取したフクギの皮の煎汁と、灰と水の体積割合別の灰汁1:2のサンプル4つ、1:3のサンプル4つ、合計8つのサンプルを使用した。更に、パターン3では、各時間別に採取したフクギの皮の煎汁と、灰と水の体積割合が1:2及び1:3の灰汁をそれぞれ混ぜ、作成した混合液の合計8つのサンプルを使用した。

以上の材料を用いて、聞き取り調査に基づき、布に色を定着させる3つの方法(パターン)を実行した。布の染色回数は、3つの染色工程の時間ごとに、布一浸す→絞りの工程をそれぞれ3回ずつ繰り返し行った。

6. フクギの皮の煎汁と灰汁の pH 値とボーム比重の測定結果

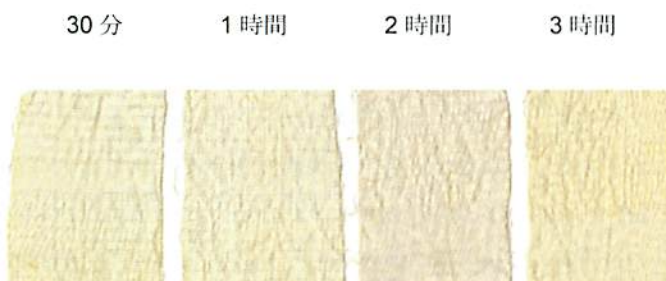
pH 値とボーム比重を測定した結果は、以下のとおりである。

- ①フクギの皮を30分煮込んだ煎汁の pH 値は 5.49、ボーム比重は 2.0
- ②フクギの皮を1時間煮込んだ煎汁の pH 値は 5.30、ボーム比重は 2.8
- ③フクギの皮を2時間煮込んだ煎汁の pH 値は 4.85、ボーム比重は 3.0
- ④フクギの皮を3時間煮込んだ煎汁の pH 値は 4.87、ボーム比重は 3.1
- ⑤灰と水の体積割合が 1:2 の灰汁の pH 値は 10.5、ボーム比重は 4.0
- ⑥灰と水の体積割合が 1:3 の灰汁の pH 値は 10.5、ボーム比重は 4.0

7. 布を染色した結果

1) 煎汁のみでの染色

《皮を煮込む時間》



写真Ⅲ-34

写真Ⅲ-34 は、フクギの皮の煎汁のみに3回ずつ浸し、

染色を行った結果である。フクギの皮の煎汁にのみ浸すと色はあまり定着しなかった。皮を煮込む時間の違いによる色の変化はあまり見られなかった。

2) 灰と水の体積割合 1:2 と 1:3 での染色

《皮を煮込む時間》

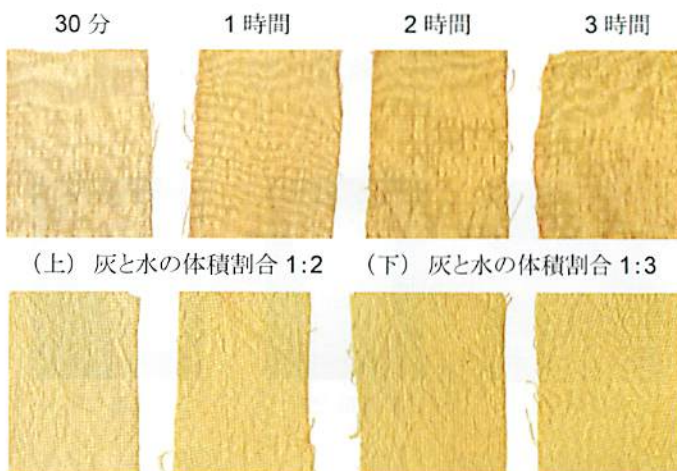


写真Ⅲ-35

写真Ⅲ-35 は、煎汁と灰汁に交互に3回ずつ浸し、染色を行った結果である。灰と水の体積割合 1:2 の方が、灰と水の体積割合 1:3 よりも、皮を煮込む時間の違いによる色の変化が見られた。つまり、灰と水の体積割合 1:3 よりも 1:2 の方が、色が濃く出ている。

3) 煎汁と灰汁の混合液での染色

《皮を煮込む時間》



写真Ⅲ-36

写真Ⅲ-36 は、煎汁と灰汁を加えた混合液に3回ずつ浸し、染色を行った結果である。灰と水の体積割合 1:3 よりも 1:2 方が、色が濃く出ている。皮を煮込む時間の違いによる色の変化

はあまり見られなかった。

8. 染色実験のまとめ

フクギの皮の煎汁のみに浸し、染色を行う方法よりも、煎汁と灰汁に別々に浸し染色する方法(写真Ⅲ-35)と、煎汁と灰汁を加えた混合液に浸し染色する方法の方が、それぞれ色が濃く出た。

次に、フクギの皮を30分煮込んだ煎汁で染色を行ったとき、各条件の中で特に色が薄く出た。逆にフクギの皮を2時間煮込んだ煎汁で染色を行ったとき、1番色が濃く出た。

灰の割合別に見ると、灰と水の体積割合1:3よりも1:2の方が、色が濃く出た。

更に、染色方法別にみると、煎汁と灰汁に別々に浸し染色する方法では、皮を煮込む時間の違いによる色の差が大きく見られた。一方、煎汁と灰汁を加えた混合液に浸し染色する方法では、皮を煮込む時間の違いによる色の差は、あまり見られなかった。

1番色が濃く定着したのは、次のような条件と方法のときであった。

フクギの皮を煮込む時間は2時間。フクギの皮の煎汁のpH値は4.85、ボーマ比重は3.0。灰と水の体積割合は1:2。そのときのpH値は10.5、ボーマ比重は4.0。フクギの皮の煎汁と灰汁を別々に浸す染色方法のとき。

IV 結論

本研究では、多良間島の「八月踊り」で使われる衣装の伝統的な染色方法や材料となる染料植物について、聞き取り調査を行い、これらの情報に基づいて布の染色実験を行った。

現在の多良間島の「八月踊り」では、化学染料で染められた既製品が使われているが、昔は島内の草木で染色した衣装が使用されていた。当時、染料として利用されていた植物は、フクギ、テリハボク、ヘチマ、シャリンバイ、ヤエヤマアオキなどで、その中でも特にフクギが黄色染料として多く使われていた。「八月踊り」の衣装の中でも、袴、羽織、風呂敷、旗などが染料植物で染められていた。『多良間村史』(民俗編)には、フクギの利用方法について、染色の際に石灰を使用していたことが記されている。しかし、島民からの聞き取りによると、石灰よりも木灰をよく利用していたことが分かった。

フクギを利用する染色工程は、材料の採取、材料の煮込み時間と方法、布や糸に色を定着させる方法に大きくわけることができる。材料の採取はフクギの幹をハンマーなどで叩

き、皮を剥ぐという方法で行っていた。採取した材料は、大きな鍋に入れて薪で煮込むが、その煮込む時間は決まっていなかったという。

布や糸に色を定着させるには、大きく3つの方法があった。①煮込んで得られた煎汁のみに浸し染色する方法。②煎汁と灰汁に別々に浸し染色する方法。③煎汁と灰汁を加えた混合液に浸し染色する方法など。

布を染色した結果を時間別に見ると、フクギの皮を30分煮込んだ汁を使用したものが、各条件の中で特に色が薄く、2時間の場合が各条件の中で1番色が濃かった。染色方法別に見ると、フクギの皮の煎汁と灰汁を別々に浸す方法で行った時、色の定着が時間ごとにより差が出た。フクギの煎汁と灰汁の混合液に浸した方法では、皮の煮込む時間の違いによる色の差は大きく見られなかった。また、フクギの皮の煎汁のみに浸すよりも、灰汁を使用した場合の方が色が濃く出た。灰と水の体積割合が1:2と1:3での色の差は、1:2の方が濃く発色した。

染色実験を行った結果、一番色が濃く定着した条件は、次の通りであった。皮を煮込む時間が2時間、フクギの皮の煎汁のpH値が4.85、ボーマ比重が3.0、灰と水の体積割合が1:2の時(pH10.5、ボーマ比重4.0)、フクギの皮の煎汁と灰汁を別々に浸して染色する方法であった。これらの実験結果から、以前の「八月踊り」の衣装は、上記の条件に近い方法で染色されていた可能性が高いと判定された。

現在、「八月踊り」で使われている衣装は、化学染料で染められた既製品がほとんどである。以前は、多良間島で採取できる植物の染料で染色していた。その色合いは、化学染料よりも植物染料の方が色艶もよかったという。「八月踊り」の主要な色は黄色である。この色を伝統的な島の染色技術で再現し生かすことこそ、島の伝統文化の真の価値を高めることになると思う。

謝辞

多良間村での現地調査では、下記の方々にご多大のお世話になりました。ふるさと学習館の垣花昇一さん、各字のスタッフ座長である嘉味田和夫さん、桃原光盛さん、聞き取り調査に協力して頂いた浜川史江さん、西筋ヒデさん、運天幸子さん夫婦、仲宗根玄宗さん、洲鎌哲さん、洲鎌愛子さん、高江洲秀さん、高江洲良要さん、佐和田朝正さん、天久春則さん、下

地久雄さん、豊島トシさん、豊見山ミヨさん、長嶺春雄さん、大城常佑さん、野原マサコさん、美里タケさん、下地トミさん、下地マサハルさん、萌木の里の皆様、民宿丸宮の本永清一さん、本永ヨウタクさんに心から感謝いたします。

また、多良間島滞在期間中に生活を支えて下さった株式会社海秀の皆様、そしてフクギの染色実験にもご協力頂いた豊見山正教育長（現在、村議）と豊見山栄子さん、滞在期間中に親切にして頂いた島民の皆様方に、心より厚く御礼申し上げます。

pH 値の測定については、琉球大学農学部生物資源科学科の上地俊徳準教授と研究室の学生の皆様にご指導いただきました。心から感謝申し上げます。

同じ研究室の島袋奈津希さん、二里葵さん、前田千春さん、他の学生たちとも有意義な研究生活を送ることができました。とくに二里葵さんには、多良間島での調査で、アドバイスや調査の協力をいただきました。心から感謝します。

参考文献

1. 岩井正浩. 2007. 沖縄県多良間島の八月踊り. 神戸大学大学院人間発達環境学研究科研究紀要第 1 巻第 1 号. p151~p162.
2. 上村六郎. 1982. 沖縄の染色文化の研究. 第一書房.
3. 藤村市政. 1974. 多良間村. 沖縄県教育委員会文化課. 沖縄の民俗資料編第 1 集. 根元書房. p260~p266.
4. 沖縄県農林水産行政史編集委員会. 1983. 沖縄県農林水産行政史.
5. 多良間村史編集委員会. 1993. 多良間村史第四巻資料編 3 民俗. 多良間村.
6. 多和田真淳. 1980. 多和田真淳選集. 古稀記念多和田真淳選集刊行会.